

また、然別のアイヌ、イナウタカアイノはその背丈は18トメ余りあり、三国志に出てくる胆の据わつた武人のような顔をしています。昔話に登場する茨木童子か酒呑童子かと思わせる体つきです。

アラユクとイナウタカアイノの二人の後ろに十数人の一族が並び、私たちが座ると、その中の一人が私に向かつて「ニシバ、イランカラブテ（旦那、お久しぶりです）」と話しかけてきたので、皆が驚きましたが、アラユクの次男のシルンケアイノという者で、どうしたことかと良く見れば、一昨年にオホツナイ川から、幌泉までの旅に同行してくれた者でした。

シルンケアイノは私の前にやつて来て、その時の礼を礼儀正しく丁寧に述べ、私もこのようない山奥まで来て知っている者に会うことは実に珍しいことだと大層うれしく思いました。そして、彼は一族の者に向かつて「この旦那は遠くは樺太のウイルタ、アムール川下流域の山丹、南樺太の多来加湾までも行つたことのある人だ」と、私を紹介したので、集まつた人たちの私を尊敬する様子が増し、それにつれて、樺太のことを色々と質問されるままに、こと細かに話して聞かせたので、

皆は大変喜んでくれました。そして、熊肉、鹿の腸、凍らせた鮭などを大きな平らな鉢にうず高く盛つた料理や、アイヌの酒を勧めるのでした。宴が盛り上がりると、皆は腹づみを打ち、シノチサケを歌つて心の底から私たちをもてなしてくれるので

今日といふ 今日ぞしりける 一つきの

酒にまさりし 物の無とは

弘（ひろ）  
（松浦武四郎）

（このように良い気分で飲む

一杯の酒に勝るものはない

今日はそれを改めて思い知った）



岸田農場の碑

アラユクが武四郎の一行をもてなした場所として石碑が建てられている。